

研究課題	注意制御能力に関する新たな評価指標の開発				
氏名	平田 正吾	所属	総合教育科学系	職名	准教授
APRIN e-ラーニングプログラムの受講		受講済の場合はチェックをすること			
【研究成果の概要】 （文字の大きさ9ポイント・字数800字～1600字程度）					
<p>自らの注意を適切にコントロールすることは、社会生活や学校生活を円滑に送る上で重要であり、またこうした注意制御能力の実態を、生理学的にも簡便に評価しうるようにすることは、客観的かつ信頼性の高いこの能力のアセスメントを考案する上でも、有用であろう。本研究では、よく知られた音刺激に対する脳反応である聴性脳幹反応(ABR)を取り上げ、注意制御課題を行っている際に、このABRにどのような変化が現れるのか計測することから、新たな評価指標の開発を試みた。</p> <p>ABRは対象者が睡眠時にも観察することができる安定した脳反応であるが、近年、対象者の覚醒状態を反映する指標としても捉えられる可能性が指摘されている。定型成人16名に対して、注意制御能力を評価する課題としてよく知られた数字ストループ課題を実施すると共に、その際のABR波形に変化が認められるか検討した。</p> <p>ABRの計測は、対象者の頭頂部に記録電極を設置し、右耳垂に基準電極を、左耳垂にグラウンド電極を設置した。記録開始前と記録終了後に、全ての接触インピーダンスが、5k以下であることを確認した。音刺激は約60dB SPLのクリック音を、90ミリ秒に1回の頻度で右耳へのチューブホンにより呈示した。その後、ストループ課題における刺激呈示をトリガーとして、そこから300ミリ秒後までを分析区間とした。分析区間に含まれるクリック音の立ち上がり時点をトリガーとして、そこから10ミリ秒後までをエポックとして分析し、ABR波形を求めた。先行研究では、認知課題を課した全条件におけるABR波形と、何も認知課題を行っていない状態（ベースライン）でのABR波形を比較しているため、本研究でもベースライン約80秒におけるエポックの加算波形を算出した。その後、クリック音の立ち上がりから約5ミリ秒後に生じる明らかな波を波とし、その振幅を求めた。</p> <p>測定の結果、数字ストループ課題を行っている際の波の減少が大きい者ほど、ストループ効果が強くなる傾向にあった。今後は、こうした振幅変化の度合いの個人差が、他の注意制御系の課題とどのような関係にあるのか検討していく必要がある。</p>					
【研究成果発表方法】					
関連する検討を更に行った上で、学会発表や論文投稿を行う予定である。					

発表論文名（口頭発表を含む）、氏名、学会誌等名（投稿中・投稿予定・執筆中）を記入すること。

本経費を用いて、報告書（冊子等）を作成した場合には、本様式とともに1部を提出すること。

なお、提出された報告書は教育実践研究推進本部を通じて附属図書館へ寄贈する。